

激動の中で生かされて

神奈川県 澤田實雄

昭和二十年当時、私は奉天市の郊外北陵地区に住んでいた。北陵在満国民学校の四年生となったその年は、いよいよ戦勢は予断を許さぬ状況となり軍国主義の教育で明け暮れていた。

毎朝の朝礼時には、老校長は壇上にて「戦争に勝て！」と絶叫し、「ようし、勝つぞ！」と生徒はそれに応答した。また、教育勅語の暗唱を厳しく指導され、学校菜園の作業、防空壕掘り、畑の草取りなどに追われる毎日であった。

八月九日のソ連軍侵入に伴って、日本人はグループを組んで南満に疎開することとなった。

私の父は、四十二歳になっていたが関東軍の召集を受けて、北陵近くの守備隊に配属されていた。母は、十二歳の姉を頭に五人の子供を引き連れて疎開せねば

ならない。虫の知らせというか、出発の前夜、突然に父が帰宅した。この日の夕食が、父との最後の夕食となってしまう。

数百人の疎開者は、朝早く奉天駅前の広場に集合して避難列車に乗車した。しばらくして、列車は瓦房店という小さな駅に到着して全員降ろされた。そこで街の日本人学校に身を寄せて集団生活が始まった。

生まれて初めて見るセミの鳴く声が、特に激しかった八月十五日に日本の敗戦を知らされた。

一週間ほどしてソ連軍が進駐してきて、日本人の恐怖心は一層高まった。幸いにして巡視にきた二人のソ連軍将校は、我々に何の危害を加えることなく帰って行った。瓦房店では約一カ月を過ごしたが、そのうちに奉天に戻ることとなり我が家に帰った。

今までは安全であった奉天市街も、敗戦によって日本人と中国人の立場が逆転し、彼らの横暴さが目につきただててきた。ソ連兵はマンドリン銃を抱え、粋な帽子を斜めにかぶってうろうろして、時々、略奪行為をしていた。

収入の途絶えた日本人は、家財道具の売り食い生活を始めた。

疎開から戻れば父が待っていてくれるものと信じていた母の願いは、無残にも裏切られた。暗たんたる母子家庭の暮らしは、経済的不安とソ連兵に対する母の恐怖心とで子供の私たちには計り知ることができないものであった。それでも日本人同士が寄り添って身の安全を考える毎日であった。

そんな時、私がジフテリアにかかり、姉妹も次々にのどを痛めてしまった。幸いに子供たちは皆、回復したが、栄養状態が悪かったので母の顔一面にできものが出て、外にも出られずにひっそりと蚊帳の中に入って養生していた。

小学校は閉鎖されたため各地区にて、有志の青年が、子供たちを集めて学習を指導してくれた。

十月になり寒さが加わったある夜、寝静まった我が家の裏戸口を何者かがけりあげている音がして目を覚ました。母は、ガタガタと震えていた。そんなある日、奉天市街地に住んでいた伯父が心配して訪ねてき

た。窮状を知った伯父は、早速に私たち一家を呼び寄せて同居させることを決意して帰って行った。間もなく伯父の家での生活が始まった。もうそのころは、粉雪の舞う季節に入っていた。

市街地にある各小学校では何とか分散授業がなされていた。すぐに転入手続きをして平安小学校に入った。朝礼は運動場で行い、ラジオ体操の後、各クラスごとに別れて応急の教室にそれぞれ向かった。私のクラスは、ほど近いところにあるクラスメートの大きな家の二階の座敷であった。教材の乏しいなかで、担任の先生はさぞや大変だったことだろうと今でも思っている。

ある日の下校時、根雪を踏みしめて歩いていると、みすばらしい一団が列をなして近づいて来る。着の身着のままの姿で疲れ果てて力なくすすけた顔をして歩いているが、それが日本人の集団であることがすぐに分かった。彼らは多分、奥地からようやくのことで奉天市にたどり着いた人々であろう。その後、あの人たちはどうなったのか察するに余りある。

伯父の家も子供五人を抱えた七人家族で、私たち一家を含めて一つ屋根の下で十三人という大所帯の生活であった。満鉄社宅である伯父の家は、四部屋とサンルームがあつたが、私たち親子は六畳一間を貸してもらった。伯父も失業したため収入の道を考えねばならなかつた。

そのうちに、ソ連兵の侵入に備えて避難方法も工夫しなければならなかつた。床下に人が通れるほどの壕を掘り、貴重品を隠した。社宅の各戸の玄関には、枕木を利用してバリケードを築き、ふだんは裏戸口より出入りしていた。

ところがある日のこと、昼過ぎに突然ソ連軍のトラックが止まり、ソ連兵が二人降りてきて玄関口に近づき、バリケードを突破して入ってきた。私たちの部屋には子供六人と母がいたが、急なことで床下に避難するチャンスを失ってしまった。母の青ざめた顔を見て、子供たちは、遊ぶのをやめて部屋の片隅に一列になって息をひそめていた。二人のソ連兵は鼻歌を歌いながら何か物色している様子が、ここにも伝わってく

る。ついにこの部屋の入口まで近づいてきて、ゴトゴトと音を立てていたが、そのうちに足音が遠のき、別の部屋に向かったようだった。時間にすればわずかな分のことであつたらうが、随分と時間がたつたような気がして、足音が遠のいたときにはがっくりして全身の力が抜けたような気持ちになつた。そのうちにソ連兵は家から出て行つた。

伯父たち家族はどうしているかと心配になつた。もうそのときは母も下の弟と押し入れに隠れていたが、いたたまれずに外に飛び出し助けを求めた。伯父たちは危険を察知していち早く外に避難したらしく、しばらくして戻ってきた。お互いに無事を確かめてホツとした。結局ソ連兵はめぼしい物も無いので出て行ったのだらう。子供たちは大人の様子を見て部屋に戻つたが、三歳の弟が押し入れに一人取り残されて、ギャーギャー泣いているのでみんなで大笑いした。しかし笑つて済ませることができて幸いであつた。

伯父は知り合いから年配の和食調理の職人を紹介され、住み込みで、こぶ巻き、てんぶら、黒豆の煮物な

どを作って、屋台車にて近くの広場に売りに行った。私も、重箱三段重ねにこぶ巻き、黒豆などを詰めて、近くの満鉄社宅を売り歩いた。ある家では、子供の私に同情して台所に引き入れて、残り全部を買い上げてくれた。そのほかに、あんぱん売りや、樽に入れた梅干しを母と一緒に売り歩いたりして、その日その日を生きていた。

とにかく何かして、生活費を得なければならぬという思いでいっぱいであった。

昭和二十一年のささやかな正月も過ぎて、本格的な厳しい冬がやってきた。その寒さに日本人は家々に閉じこもって暮らしていた。

そのころより日本への引揚げという言葉がささやかれるようになってきた。在満邦人は全て強制的に送還されるのであろうかと考えた。私は子供ながら「あっそうか、満州で生まれて満州で育った私だが、この地はもう日本人がおれない土地なのか……」と思い、寂しい気持ちでいっぱいであった。

思えば昭和十年二月に吉林市で生まれ、その後一時

期、海城市に移り住んだことはあるが、大部分を奉天市で過ごしていた。満州は私の故郷なのである。小学校入学以来、毎年冬は、校庭のスケートリンクで得意のロングスケートで走り回っていた。

生を受けて十年とはいえ、多くの体験をした大地である。「内地に帰る」というその内地とは一体どんな所なのか想像もつかない。内地は日本人の祖国であり、全部日本人が住んでいると聞いてもピンとこなかった。昭和七年に満州国が建国し、五族協和の名のもとに、多民族との共存は当たり前と思って育った私にとって、行く先に何が待ち受けているのか見当もつかなかった。

大人たちは、無事に内地に帰り着くことのみを照準を合わせた生活をしていた。

奉天は満州の中期に位置しているので、引揚げも遅れるだろうと考えていた。遅ればは死活問題である。

伯父の家に転がり込んで数カ月がたった二月のある日のこと、ささいなことで母と伯母が衝突し、口げんかが始まった。子供たちはあっけにとられて見守るば

かりであった。

居候の家族にとっては肩身の狭い日が続いた。大連市には、母の姉と妹の家族が住んでいたが、今は消息が全然分からなかった。伯父は、母に思い切って大連市に行った方が、早く引き揚げられるのではないかと話を持ちかけてきた。伯母との折り合いも悪くなっていることもあり、また、母にとっても生まれ故郷ともいべき大連への思い入れも強かったし、何とかここを脱出したいとの気持ちもあったのではないか。しかし、今思えば全く無謀なことであった。敗戦からまだ半年を過ぎたばかりのこの時期、ちょうど残留孤児が多く出たときでもあった。

考えると矢も盾もたまらずに、母は脱出準備に取りかかった。伯父も満鉄社員だった関係で乗車券の入手ルートを教えてくれた。私は母に連れられて乗車券を買いに中国人でゴった返しているカウンターに向かった。中国人の係員が心配そうに乗車券を渡してくれた。大連行きの乗車券を、母は大事そうに握りしめて浮き浮きした気分になって、旅行に必要なものを考え

ているようであった。

二月下旬、雪深い中をリヤカーに手荷物を乗せて、伯父といとこにも加勢してもらって奉天駅に向かった。私と一歳年上の姉は、水筒のかわりに一升瓶に水を入れて背中にぶら下げた。下の妹二人と弟の三人は、母について行動することとした。奉天駅は人、人であふれていた。改札口から長い列ができていたがほとんど中国人のようであった。中には日本人も混じっているように見掛けたが、みんな中国人の服装をしているので見分けられない。

当時、海産物を仕入れるために無理をおして大連に出掛ける人がいたらしい。大連駅までは片道約六時間と言われていた。しかしこの大勢の人たちを見たら果たして列車に乗り込めるだろうかと不安になってきた。

周りの中国人は、私たち親子を奇異な目でながめていた。そのとき一人の中国人が近寄ってきて「こんな状態では、あなた方はとても列車には乗れませんよ」と言った。また、別の人は「五人の子供はとても無理

だから、一人私にくださいませんか！」などと言っていた。指をさされた下の妹は、この様子を察知して大声で泣き出した。話しかけた中国人は、びっくりして「ごめん、ごめん」と謝り、近くの売店からお菓子を買ってきて渡し、去って行った。

いよいよ発車時間が迫り改札が始まると、それまでの列が崩れて、人々は我先にと改札口に殺到した。私たちは列外に弾かれてしまった。こんな状態ではとても乗ることは不可能とは思ったが、とにもかくにも乗車券を握っている母は一生懸命だった。列車に乗り込めば数時間の辛抱で大連に行けるとの思いだけだった。私と姉には、はぐれても終点は大連駅なのでから乗るようにと指示した。幸いに日本人の夫婦がいたので、その人について乗るように言い含められた。人々は地下道を走って乗車ホームに急いでいる。私も母たちの姿を見失いそうになりながらも走ってホームに向かった。

ようやくのことで目指す乗車口までできたが、人々はデッキからあふれているし、とても乗り込める状態で

はない。私たち二人は子供なので、何とか人の脇をすり抜けて乗り込み、やっと中ほどまで入ったが、中国人の臭気の中で立っているだけでも気分が悪くなった。先に乗ったはずの日本人夫婦の姿も分からなくなった。このままでは危険と感じ、私と姉はいったんホームに降りることにした。

発車時間は近づいているのに、母たちの姿は見当たらない。乗り込めたのかどうか心配になってきた。ホームで立ちすくんでいたが、姉が「あんたはここで待っていてちょうだい、母さんたちを捜してくるから」と言い残して地下道を下り改札口の方に行ってしまった。

一人ぼっちになってしばらくそのままだったが、姉もなかなか戻って来ないので不安になって、姉の行った方向に歩き出した。あれほど多くいた人々は何とか列車に乗り込んだらしくまばらになっていた。私も地下道を下り、姉の姿を追って改札口の方を見回したが、姉の姿は見えなかった。

その時、日本人の青年が飛んできて私の手をつか

み、乗車口のホームへ引つ張って行った。私の足は宙に浮いたかっこうで走っていた。乗車口のデッキから母が顔を出して手招きしている。青年は、乗車口から私を思い切り強く押し込んでくれた。母は私をつかみ車内に引き入れた。

何とその車両には暖房が入っていて別世界のようにあった。はしっここの座席ではあるがみんないるではないか、私は狐につままれた思いであった。

発車ベルの音がやみ、列車はひと揺れして動きだした。車内の人影はまばらであり中国人の姿がなく、軍服姿のソ連軍将校が乗っている。すぐにこの車両はソ連軍専用車両であることが分かった。それはほんの数分間の出来事であつたらう。母はようやく気を取り直して、今までの一部始終を話してくれた。

母たち四人は、我先に走り出した人々に押されながらも、いったんは乗車デッキに乗つたらしいが、そこは母子がいられるようなところではなかつたそうだ。たちまち子供たちは悲鳴を上げて泣き出した。そんな騒ぎを聞きつけたのか、ソ連軍専用車両のドアが開け

られて、一人の将校が母たちを専用車両に引き入れてくれたそうだ。母が車内を見渡したところ、女性の将校も見受けられたので恐る恐る入る気になった。将校たちは酒を飲み歓談している様子だった。

母はほっとしたが、すぐに私たち二人のことが心配になつてきた。ふと窓の外を見ると線路を隔てたホームに姉がうろろとしてるのが目に入った。すぐに姉の名を叫び、窓を開けようとしたがなかなか開かない。すると先ほどの将校がやってきて「この窓は全部固定してあるので開かない」と身振り手振りで教えてくれた。母は半狂乱になって姉の名を叫び続けたので、将校はデッキのドアを押し開けてくれた。姉はすぐに気が付いたが、発車時間が切迫していたので線路をまたいでデッキによじ登った。その時、日本人青年が手を貸して助けてくれたとのことだった。

姉は無事に見つかったものの私の姿が見えない。姉に聞けば乗車ホームに待たしてあると言うが、ホームにはもうだれも見えない。そのとき親切な青年が「一人の男の子が地下道を歩いているのを見かけた」と母

に告げると「それ、それ！それが私の子です」と母が言った。その言葉を終えるか終えないうちに、その青年は列車を飛び降りて私を捜しに飛んできたのであった。

やっと座席に座った母子六人は、ぼう然としていて言葉も出ない状態であった。

今思えば、日本人青年の親切な行爲と、ソ連軍将校の同情に助けられた、あまりにも幸運な旅であった。

夜が明けかかったところに、列車は大連駅ホームに滑り込んだ。二月下旬のことで、大連にはまだ根雪が残っていたが、その中を聖徳街の伯母の家にとり着くことができた。

春近い大連の街は、戦争、戦争で明け暮れていた奉天での暗いイメージと違い、明るい印象をうけてみんなは心が和んでいた。終戦を境にして、中国人街からの襲撃、暴動があり日本人たちを恐怖に陥れたが、それも一段落したころであった。

私と姉と妹は、下藤小学校に転入した。当時、職を失った日本人たちはいろいろと工夫を凝らして生活の

道を考えていた。近くの通りに日本人の立ち売りや屋台が並び、にぎわっていて、芋の粉団子や、ピンズも売りに出ていた。私も登校前に、町内にピンズを売り歩いた。母は、授産所よりミシン仕事を請け負って励んでいた。

新学期を迎え私も五年生になった。大連はアカシアの香りが漂う季節となった。

大連の小・中学生は野球が盛んで対校試合がよく行われていた。私も生まれて初めて野球のルールを覚えてキャッチボールを楽しんだ。小学校・中学校・女学校の合同運動会が開催され、楽しみの少ない日本人たちが多く運動場に集まりにぎやかだった。

元来、歌好きの私も軍歌から子供らしい歌を歌うようになった。よく歌ったのは、「おぼろ月夜」「月の砂漠」「しかられて」などであった。

少年たちは、道端に落ちているタバコの空き箱を集めてメンコ代わりにして遊んでもいた。

敗戦から二年目を迎えた大連ではあるが、戦前日本人が楽しんだ、星ヶ浦・静ヶ浦の海水浴場はひっそり

としている。子供たちは少しでもおかずの足しにしようとして、魚釣りやこんぶ、わかめ取りに出掛けていた。

夏休みが終わり、大連市内にコスモスが咲き乱れる季節となった。そのころ母たち三人は、小波町の叔母の家に分かれて住まわせてもらっていたので、姉、

私、妹の三人も聖徳街から小波町に移って、母と一緒に暮らすことになった。叔母は母より三つ年下で、叔父は東南アジア出張中に終戦となり消息不明となっていた。子供が三人いたので、一つ屋根の下に十人が寄り添って生活する毎日が続いた。食べ物は次第に欠乏し、大根の千切りに粟が浮いた雑炊をすする毎日で、子供たちは、すきつ腹を抱えていた。

そんな中、唯一の栄養源は皮むき南京豆であった。いりあげた味は香ばしく宝物のようにして大事に食べた。何しろ子供が八人に大人が二人、それに平等に分けるので一回に各自おちょこ一杯ぐらいである。一粒一粒をゆっくりと口に入れ味わって飲み込んだ。

同じ奉天にいる日本人の生活でも、商店を営んでいる人たちが、定職に就いている人々や、財産の豊かな

人などは結構な暮らしぶりをしている人も多かった。

近所のある家からは琴の音が流れてきたりしていた。

二期から私たちは、静浦小学校に転校した。ここも野球が盛んであった。近隣の小学校との対校試合では目の色を変えて応援した。

そんな折に、音楽の指導に熱心な担任の先生が、合唱団を組むと言われたので私も入れてもらった。主に五、六年生で二十人ほどの団員のなかで、男子は四人で女子が主体であった。放課後、熱心な指導を受けて、三部合唱曲を三曲ほど覚えたところで、日ごろの練習の成果を発表する機会が与えられた。そのころ、大連港の埠頭の待合室には、第一次引揚者たちが収容されて引揚げ開始を待っていた。その方々を慰問するということで、私たち合唱団の一行はトラックの荷台に乗せられて埠頭に向かった。寒々とした待合室には多くの引揚げ待機者が生活をしていった。私たちは大歓迎を受け、人々は目を輝かせて合唱を聴いてくれた。少しでも慰めや励みになったことだろうと思うと、子供心にも嬉しかった。

その後、大連からもようやく引揚げが始まったことを知らされた。私たちの二家族も早期引揚げの希望を出していたので、年内か、年明けかと毎日首を長くして待っていたが、とうとう昭和二十二年のお正月がきてしまった。

正月過ぎ、ついに引揚げが決まった。引揚げ準備をしていたある日、子供たちは近くの集会所に集められた。そこには若い共産党員がいて労働歌を指導し、この歌を覚えなさいと引揚げさせなさいと言うので、子供たちは一生懸命に練習をした。

叔母の家族は群馬県へ、私たちの家族は熊本県に帰ることとなった。父の故郷は熊本の山村である。まだ見ぬ帰郷先に不安と期待が入り交じっていた。母は、父と大連で結婚して以来、二度ほど帰ったとのことだが、父が一緒でない母にとっては、まさに異国のようなどころである。

一月半ばにやっと引揚げ命令がおり、粉雪の舞う早朝に、示された集合場所である大連港埠頭の収容所に向かつてトラックに乗せられた。その日は、その収容

所で一泊した。

翌日、大棧橋に横付けされている信洋丸という貨物船に乗り移った。約三千人ほどであった。夕暮れ迫った大連港を船は静かに離れていった。速度の遅い船で三日かけて長崎の一つの入り江に入っていた。

佐世保に上陸した私たちは、DDTの洗礼を受け、雑草の生い茂る丘を歩いて海兵団の兵舎であった収容所に到着した。そこで手続きを済ませてそれぞれの目的地に向かうのである。真冬というのに青々と樹木が茂る山々を見て、数日前までの大連とはまるで違う風景に驚かされた。段々畑にわらぶきの家が点在し、家々の造りが弱々しく感じられた。一週間ぐらい収容所に滞在して小さな駅から熊本に向かって出発した。「引揚者バス」を受けているので、それぞれの家族は思い思いの路線を経て目指す帰郷先に向かった。私たち母子は鳥栖駅にて熊本方面の列車に乗り換える予定だったが、夜遅くなり列車便が無いとのことで、鳥栖駅の地下道で一夜を過ごすことになった。寒々としたコンクリートに母子六人が体を寄せ合って夜明けを

待った。

翌朝、熊本行きに乗ったが、目的地に着いたころには夕刻になってしまった。駅から山奥に約六キロメートルほど入った所である。

父の姉である伯母の家は、貧しい農家であった。二十三歳と十八歳の二人のいとこがいた。到着した夜は、久しぶりに白米のご飯にありついた。それに旧正月であったのでお餅までごちそうになり大喜びした。

私たちの住まいは庭の隅にある倉に決まった。私は七度目の小学校に転入した。最初は言葉が分からずに閉口した。それに生活習慣に慣れるまでに時間がかかった。また、食糧事情が悪く栄養物がとれないので、食べられるという庭の雑草までも食べてみた。私たちは山に入り、村の友達から教えてもらって、木の実や草の実やのびる等をとってきて腹の足にした。夏を迎えて倉の中の生活は、耐え難い暑さと蚊に悩まされて、母子の体力は次第に消耗していった。

ようやく涼しい秋となり、小学校の運動会は青年団も加わって大変な盛り上がりようだった。

そんな折、親せきの方のお骨折りによって小さいながら我が家を建ててもらうことになった。幸いに父の名義の小さな土地があり、そこに家造りが始まった。屋根は竹がわらで、柱は深く掘った穴に埋め込み、壁は土とわらをこねたものを塗る、といった家であったが、村人たちがそれを見て、毎日三人ほどの人が入れ替わりして加勢にきてくれた。本当に親切な人々に支えられて、私たち母子の家はできあがったのだ。四畳半に土間という住まいは、小さくても夢のようであった。

ところが、家ができあがってすぐに一年生になっていた妹の体調が弱り、寝込んで一週間もしないうちに急死してしまった。その一カ月後には、四歳の弟も後を追うようにしてこの世を去ってしまった。そのうちに私まで体調を崩して寝込んでしまい、六年生の三期は一日も登校できずに残念であった。結局、結核の診断を受けて一年間を棒に振ってしまった。姉までも同じ病気で半年休学するという、我が家にとっては最悪の年であった。

その後、一時的には回復したものの、更に、胸椎カリエスになり、絶対安静の身で五年間寝たきりという生活を余儀なくされてしまった。ようやく再起できたのは昭和三十年になってからである。

終戦後、十年近くたってから父戦死の報が入った。

父は、敗戦後の武装解除の際に満人の暴徒の襲撃を受けて戦死をしたとのことであった。若き日、希望を抱いて大連に渡った父は、日本の運命と共に四十三歳の若さで満州の土となってしまった。

幼い五人の子供を連れて満州から引き揚げ、慣れない土地で子供を育てた母は、苦勞に苦勞の連続であった。その母は九十歳を迎えた。

私は、手に職をつけたおかげで、今日まで生きることができた。感謝の気持ちでいっぱいである。

満州へ、満州へ！

そしてその果ては……

長野県 長沼 とめ子

思い起こせばあの衝撃の敗戦から五十数年、人間が宇宙に旅行できるのも、そう遠いことではないと言われる時代になってきました。

人々の思いの中には、もうあの時代のことなどはひとかけらも残っていないでしょう。否、知らないことなのでしょう。暖衣飽食となり、消費は美德と言われる昨今は、物心両面からせいたくな世の中になってしまい、苦しみとか、悔しさとかが、つらさとか、悲しさとかの感情は、あまり感じなくなってしまうました。

今の人に、あの時代に私たちの味わった苦しみ、悔しさ、つらさ、悲しさなどを経験させる必要はないでしょう。いや、絶対に経験させてはならないことなのです。